北海道言語文化研究
No. 24, 29-52, 2026.
北海道言語研究会

ウイルタ語におけるベリー類の名称
―語彙集・辞典にもとづく一考察―*

山田　祥子

Terms for Berries in the Uilta (Orok) Language: A Study Based on Some Glossaries and Dictionaries

Yoshiko YAMADA

要旨： 本稿では、サハリン先住民族ウイルタ（旧称オロッコ）によるベリー類の名称を、19 世紀半ばから 2025 年までに発行されたウイルタ語の語彙集・辞典を主な資料として整理・検討する。記述言語学の観点から方言差や時代差を考慮しつつ、語形・語義および指示対象と推定される植物種を整理した結果、ウイルタの自然環境や、植物利用を含む生活様式の体系を反映した民俗分類が成立していることが示唆される。民俗分類と植物学上の分類は必ずしも一対一で対応しない。ウイルタ語で植物種と果実の語彙的な呼び分けが確認できるのはエゾノウワミズザクラのみで、おおよそ他では植物種と果実を語彙的には分けず、呼び分ける必要があれば迂言的な手法をとると推測される。ベリー類のみに共通する語形成要素は確認できない。sVduxV（siduxu, səduxi ほか）という語は、日本側の資料では《コケモモ類》の果実に限定される傾向があるが、B. Piłsudski の資料およびロシア側の資料によりベリー類全般を包括する総称として機能するとされている。

キーワード：ウイルタ語　サハリン　植物利用　民俗分類　ベリー類

1.　はじめに

サハリン島（樺太島；以下、サハリン）は北海道島（以下、北海道）のすぐ北に位置し、面積は北海道よりやや小さく、東西の幅およそ 160km に対し南北の長さが約 1,000km と、南北に細長い島である。高橋（2024）により、サハリンでは 1,186 種の自生植物が報告されている。

一般に緯度が高いほど植物の種類が少ないというが、サハリンの南部から北部まで旅をすると、自然景観の変化でそのことを実感できる[1]。とりわけサハリンの中央部には「シュミッ

[1] 筆者は 2008 年から 2015 年にウイルタ語の調査のためサハリンを訪問し、2010 年度は約 1 年間滞在した。その間、島内を遠距離移動する際に、島の最南部にある州都ユジノサハリンスクと北東部のノグリキを南北に結ぶ鉄道をしばしば利用した。

ト線」という植物分布の境界線があり（水島ほか（2017, 2025）、高橋（2024: 55-70）を参照）、それを南から北に越えるあたりから背の高い樹木の種類が減少し、南方で当たり前に見られる植物が視界から消える。その反面、南方では高地でしか見られないような植物が、北方では平地で当たり前に自生していることもある。つまり、北上すればするほど、人の生活域で豊かに見える植物種もある。その一例が、《コケモモ類》[2]やクロマメノキ、ホロムイイチゴ、ガンコウランなど、いわゆるベリー類を実らせる野生の植物である。

ベリー類は、ほかに漿果、液果と呼ばれることもある。本稿では、ロシア語の ягода や英語の berry の語義を参考とした便宜的でゆるやかな定義として、水分が多く、食用となる直径数 mm～1cm 程度[3]の小果実のことを「ベリー類」と呼ぶ。本稿では、その土地に自生する、すなわち野生のベリー類のみを扱い、栽培種は扱わない。以下でベリー類という際、「野生の」を省略する。

寒帯・亜寒帯などの高緯度地帯に古くから居住してきた人々の近代化以前の生業活動といえば一般に、狩猟、漁撈、採集、交易（、および一部でトナカイ等の飼育）が挙げられる。そのうち「採集」の一環としてベリー類利用は重要で、サハリンの先住民族、すなわちニヴフ（旧称ギリヤーク）、ウイルタ（旧称オロッコ）、アイヌにとっても、少なくとも 19 世紀中ごろまでは同様であったと考えられる。サハリン島内において、ニヴフとウイルタはおおよそシュミット線以北、アイヌはおおよそシュミット線以南を居住域の中心とした。もとより、居住域を分ける明確な境界はなく、特にシュミット線の周辺では三民族の居住域が交わっていた。

ニヴフのベリー類利用に脚光を当てた記述がいくつか知られている。丹菊（2013）は、ベリー（原典では「漿果」）の総称を、ニヴフ語、ロシア語、日本語について整理し、アイヌ語サハリン方言の状況も引き合いに出して考察した。水島ほか（2017）は、ニヴフの暮らす自然環境と植物利用を体系的に考察し、そのなかでベリー類の利用とその重要性も明らかにした。丹菊（2016）および白石（2024）は一般向けのエッセイで、ニヴフにとってベリー類が「第二の主食」（丹菊 2016: 146）、「カロリー上も重要な食資源」（白石 2024: 361）であると伝えている。

ここでベリー類利用の重要性だけでなく持続性にも着目したい。上に挙げた文献のうち特に丹菊（2016）、水島ほか（2017）は 1990 年代～2010 年代までの現地調査で得られた情報に重点があり、ベリー類利用を過去のものとしない。かつての生業活動はさまざまな理由で衰退したり別のものに置き換えられたりしたが、それでもベリー類は重要とされる。もちろん環境要因等による変容はあるし、失われた知恵や技術もあるに違いない。いくら重要といっても、かつてと比べればベリー類への依存度は低いはずである。それでも、ベリー類利用が過去の生業の一部を受け継ぐ、いわゆる「伝統」として持続しているという点は興味深い。

[2] 以下では、ベリー類のなかでもとりわけ、和名に「コケモモ」と付く類の植物種（コケモモ、ツルコケモモ、ヒメツルコケモモ）を包括する場合に、《コケモモ類》という呼称を用いる。植物学上の科や属などの分類とは異なることを示すため《　》を付す。

[3] ホロムイイチゴのように集合核果で一つの実を成す場合、実が若干大きく見えることもある。白石（2024: 363）はホロムイイチゴについて「直径 1.5cm ほど」としている。

さて、あくまで管見の範囲であるが、少なくともニヴフと比較する限り、ウイルタのベリー類利用についての情報は断片的である。民族誌の一部（山本 1979: 152, ピウスツキ 2018: 465, Roon 2010: 43; 2022: 671 など）や民族植物学調査の報告書（水島ほか 2005，水島 2010 など）でウイルタのベリー類利用が記録されている。辞典やテキスト資料などの言語記録でもベリー類に関する語彙や構文を拾うことができる。だが、方言差[4]や時代差、および、植物名称と植物種の関連が必ずしも明らかでない。そこで筆者は、情報の断片を拾い集めて整理し、その作業を通してウイルタによるベリー類の利用ひいては植物利用の全体に対する理解に近づけないかと考えた。これが本研究の動機づけである。

本研究は記述言語学の観点から方言差や言語変化を念頭に置き、ウイルタが彼ら自身の言語、すなわちウイルタ語[5]でベリー類をどのように呼びならわしたかを検討する。本稿ではその第一歩として、19 世紀中ごろから 2025 年現在までに公刊された語彙集や辞典を主たる資料とする。第 2 節で語彙集・辞典の情報を整理したのち、第 3 節では補足的にテキスト資料から語彙の用法を観察し、ベリー類の名称に対する現段階での考察を加える。

2. 語彙集・辞典におけるベリー類の名称

本節では、既刊の語彙集・辞典からウイルタ語におけるベリー類の名称にあたる語彙を拾い出して整理する。

〈凡例〉

- ベリーそのものでなく、ベリーを実らせる植物の他部位を指示する名称も含める。
- 原則、上述の「ベリー類」の定義に合う語彙を対象とする。水分の多い小果実を実らせる植物種であっても、ウイルタが食用としない、または食用とするかどうか未確認の場合には、考察対象から除外する。ただし、同一の語が非食用と食用の種の両方を表わす可能性がある場合には、おのずと考察対象に入る。
- ウイルタ語の表記は資料によって異なる。原則として原典の表記どおりに引用するが、アクセント記号は省略する。原典で同一語彙のヴァリアントの見出しを分けたり、一つの見出しで「, 」で区切ったりしている場合、本稿では「~」で並列する。池上（1997）の音韻表記の方針に合わせた転写を、本文中では[ ]で、表中では列を設けて併記する。
- 各表の語彙項目は、水島（2010）、水島ほか（2025）を参考に、可能なかぎり植物学上の分類に合わせた配列とする。
- 各表の語彙項目ごとに通し番号を付し、最左列に提示する。例えば、**表 2** の上から 2 番

[4] ウイルタ語の方言は、サハリン北東部のワール Val を中心とする地方で話される北方言と、中東部のポロナイスク Poronaisk（旧、敷香）を中心とする地方で話される南方言の二つに分けられる（池上 1994 [2001: 247-248]にもとづく）。

[5] ウイルタ語（旧称オロッコ語）は言語系統としてツングース諸語に分類され、とりわけナーナイ語やウルチャ語（ウリチ語、オルチャ語）との親縁関係が近いとされている（Ikegami (1974 [2001: 395])にもとづき、筆者まとめ）。なお、サハリン先住民の言語であるニヴフ語やアイヌ語はそれぞれに孤立言語で、ウイルタ語（ツングース諸語）との系統関係は認められない。

目の語彙項目の通し番号は 2.02 である。紙幅の都合上、各表の最左列・最上段のセルに文字を入れられないので「通し番号」という記載が省略される。

- 各表において、縦の太い罫線の左側は原典からの引用を基本とする情報で、太い罫線の右側では本研究における転写や推定を示す。
- ウイルタ語の植物名称と植物種の同定（推定）は、Knapen et al. (2026 to appear)の執筆準備の際に水島未記氏から教示いただいた情報にもとづく。筆者らは同論文の準備のため Schmidt (1868)、川村（1940）、潤潟（1981）、池上（1997）から植物名称を抽出して比較するデータベースを作り、そのうえで名称と植物種の関連を推定した。そのため、上述の 4 文献については各文献に記述される意味（各表の太線の左側）と、本研究が推定する植物種（各表の太線の右側）が相違することがある。
- 疑問符（？や?）は、特記のない限り、筆者の疑義を示すために用いられる。
- 和名や学名の表記は、植物学の知見で記述された諸文献（高橋（2024）、水島ほか（2005）、水島（2010）、水島ほか（2025））に照らしつつ、筆者の責任において行った。

2.1 Schmidt (1868)

Schmidt (1868)は、19 世紀半ばにドイツの地質学者・植物学者 Friedrich K. Schmidt（1832～1908）（以下すべて、人名の敬称を省略）を隊長としてロシア帝立地理学協会が派遣した大シベリア遠征の成果物で、ニヴフ、アイヌ、ウイルタそれぞれの言語による植物名称が記録されている。水島ほか（2025）では Schmidt (1868)を民族植物学の観点から再整理し、Schmidt (1868)による各言語の植物名称と現代の学名および分類体系を紐づけて報告した。

Schmidt (1868)が報告したウイルタ語の植物名称はわずか 12 項目（同一語のヴァリアントとみられるものを合併すれば 11 項目）で、そのうちベリー類に該当するのは sseducho [səduxu または siduxu]という 1 項目のみであった（**表 1**）。

19 世紀半ばのウイルタ語の方言がどの程度分かれていたか不明である。だが、採録地が後年の研究でいうところの南方言の地方であり、おおよそ、南方言につながると推測される。

水島ほか（2025: 68-71）では Schmidt (1868)が記した（当時の）学名を参考に、ウイルタ語の sseducho [səduxu あるいは siduxu]を《コケモモ類》のなかでも特にコケモモ（*Vaccinium vitis-idaea* L.）と位置づけた。ただ、Schmidt (1868)ではウイルタ語のベリー類名称がこの一項目しかないため、本当に一対一で同定されるか慎重に見るべきである。

表 1　Schmidt (1868)によるベリー類の名称（水島ほか 2025 にもとづく）

	ウイルタ名（原典表記）	ロシア名	池上（1997）式の音韻表記への転写	和名（推定）	学名（推定）
1.01	sseducho	брусника обыкновенная	səduxu または siduxu	コケモモ	*Vaccinium vitis-idaea* L.

2.2 Piłsudski (1987)

ポーランドの民族学者 Bronisław Piłsudski (1866~1918)は、1902 年から 3 年間サハリンに滞在し、ウイルタ語の文法やテキストおよび語彙を記録した。Piłsudski (1987)はその記録を翻刻し英訳を加えた資料集である。

Piłsudski (1987)に記載された語彙のうちベリー類の名称に当たると考えられるものを整理して**表 2** に示す。

前節同様、1900 年代の初頭の方言状況は不明だが、採録地をもとに、後年の分類における南方言につながる、あるいは南方言そのものと推測される[6]。

表 2　Piłsudski (1987)によるベリー類の名称

	ウイルタ名（原典表記）	ポーランド語訳［英訳］	池上（1997）式の音韻表記への転写	ポーランド語訳［英訳］からの和訳	学名（推定）
2.01	shinykty	jagoda czeremchi [bird's cherry]	sinəktə	エゾノウワミズザクラの果実	*Padus avium* Mill. (berry)
2.02	m'eʒila	jarzębina [service tree/berry]	meǰila	タカネナナカマド（樹木／果実）	*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem. (tree/ berry)
2.03	mixty	jarzębina (słodka) [sweet]	mixtə	タカネナナカマド（甘い）	*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem. (sweet)
2.04	xojo	żurawina [cranberry]	xojo	ツルコケモモ またはヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
2.05	sigdy	brusznica [cranberry]	səgdə	ツルコケモモまたはヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
2.06	dusikty	lochinia астубичникъ ? [7] =krzak lochiniowy, borowkowy (botan. nazwa) [bilberry, whortleberry]	dəsiktə	クロマメノキ？	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz. ?
2.07	s'edu ~ seduhu	jagoda [berry]	seedu ~ siduxu	ベリー（全般）	Berries (in general)

[6] 同じくピウスツキ採録の民話テキストを分析した津曲（2014）でも南方言と位置づけられた。
[7] この疑問符は Piłsudski (1987)の翻刻者による。原典では括弧でなく上付き文字。

2.3 川村（1940［池上（編）1983］）

川村秀弥（1884～1956）は 1930 年から 1947 年の間、日本領樺太の敷香（今日のポロナイスク）郊外に設置された学校（敷香教育所）で教鞭を執りながら、先住民の言語や文化について調査・記録した。川村（1940［池上（編）1983］）はその採集帳である。ウイルタ語の表記にはローマ字とカナを併用している。のちの方言分類により、南方言といえる。

川村（1940［池上（編）1983］）に記載された語彙のうちベリー類の名称に当たると考えられるものを**表 3** に示す。

表 3　川村（1940［池上（編）1983: 26-30］）によるベリー類の名称

	ウイルタ名（原典表記）	池上（1997）式の音韻表記への転写	和名（推定）	学名（推定）
3.01	ālo　アッロ	aallu	スグリ属	*Ribes* spp.
3.02	shugattora	səŋətturə	エゾノウワミズザクラ	*Padus avium* Mill.
3.03	shinukt	sinəktə	エゾノウワミズザクラ（果実）	*Padus avium* Mill. (berry)
3.04	ulidora	uldura	エゾイチゴ	*Rubus idaeus* L. subsp. *melanolasius*
3.05	eyaitama	ijaitama	エゾイチゴ	*Rubus idaeus* L. subsp. *melanolasius*
3.06	hoyo	xojoo	ホロムイイチゴ	*Rubus chamaemorus* L. s. lat.
3.07	mii ᵍ tt	miiktə	タカネナナカマド	*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem.
3.08	gākuta	gaakta	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
3.09	lopoǩt	lopokto	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
3.10	shogd shidoho	səəgdə siduxu	《コケモモ類》	*Vaccinium oxycoccos* L., *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh., or *Vaccinium vitis-idaea* L.
3.11	doshikut	dəsiktə	クロマメノキ	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
3.12	paama	paama	ガンコウラン	*Empetrum nigrum* L. s. lat.

2.4 澗潟（1981）

澗潟久治（1899~1981）は、1928 年から 1935 年の間に 4 度、日本領樺太の敷香周辺を訪れて現地のウイルタと交流して資料を蒐集した。戦後には北海道へ移住したウイルタ語話者からの聴き取りや後述の言語学者・池上二良からの助言を得、それまでの調査研究を一冊の辞典に集約したものが澗潟（1981）である。のちの方言分類により、南方言といえる。

澗潟（1981）に収録された語彙のうちベリー類の名称に当たると考えられるものを整理したのが**表 4** である。

表 4　澗潟（1981）によるベリー類の名称

	ウイルタ名（原典表記）	和訳（原典どおり）[8]	池上（1997）式の表記への変換	和名（推定）	学名（推定）
4.01	āllu	エゾイチャクソウ	aallu	スグリ属	*Ribes* spp.
4.02	aturo	トガスグリ	aturo または atulo	トガスグリ？	*Ribes sachalinense* (F. Schmidt) Nakai ?
4.03	šəŋətturə mōni	エゾノウワミズザクラ	səŋətturə mooni	エゾノウワミズザクラ（樹木）	*Padus avium* Mill. (tree)
4.04	sinəktə	ナナカマドの実	sinəktə	エゾノウワミズザクラ（果実）	*Padus avium* Mill. (berry)
4.05	ulda urāni	チシマイチゴ	ulda uraani	チシマイチゴ	*Rubus arcticus* L.
4.06	eŋaitama ~iŋaitama	エゾイチゴ、 エゾキイチゴ	eŋaitama ~iŋaitama	エゾイチゴ	*Rubus idaeus* L. subsp. *melanolasius*
4.07	xojō	ホロムイイチゴ、野苺	xojoo	ホロムイイチゴ	*Rubus chamaemorus* L. s. lat.
4.08	mīktə ~mīləktə	タカネナナカマド、ミヤマナナカマド	miiktə ~miiləktə	タカネナナカマド	*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem.
4.09	kəkkə	エゾゴゼンタチバナ	kəkkə	エゾゴゼンタチバナ	*Cornus suecica* L. [9]
4.10	xaxā	ヒメツルコケモモ（俗称ヤチフレップ）	xaxaa	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.

[8] 澗潟（1981）は動植物を表わす語彙に学名を付しているが、調査で日本語を媒介したためか、種の同定が疑わしいケースが多い（Knapen et al. (2026 to appear)）。また、澗潟（1981）が用いた学名と現在の学名表記にずれがある。混乱を避けるため、ここでは原典から学名の引用を省略し、和訳部分の抜粋のみとする。
[9] エゾゴゼンタチバナ（*Cornus suecica* L.）を食用ベリーに含める判断は、水島ほか（2005: 172）、水島（2010: 43）にもとづく。

表 4　（続き）

	ウイルタ名（原典表記）	和訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	和名（推定）	学名（推定）
4.11	gākta	ツルコケモモ（俗称ブランコ）	gaakta	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
4.12	šəgdə siduxu	赤いフレップ	səəgdə siduxu	赤い《コケモモ類》	Red berries in general
4.13	siduxu(n)	コケモモの実（一般にフレップ）	siduxu	《コケモモ類》の果実全般か？	*Vaccinium oxycoccos* L., *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh., or *Vaccinium vitis-idaea* L. (its berries in general) ?
4.14	dusokto ~dosokto ~došokto	クロマメノキ	dəsəktə	クロマメノキ	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
4.15	pāma	ガンコウランの実	paama	ガンコウラン（果実）	*Empetrum nigrum* L. s. lat.

2.5 池上（1997）

池上（1997）は、言語学者でツングース諸語の専門家である池上二良（1920～2011）が戦後北海道に移住したウイルタ語南方言の話者から採集した資料をまとめた辞典である。話者の協力による発音調査や、ツングース諸語の比較研究などにもとづく音韻表記を用いてウイルタ語が示されている。

池上（1997）に収録された語彙のうちベリー類の名称に当たると考えられるものを整理して、**表 5** に示す。

表 5　池上（1997）によるベリー類の名称

	ウイルタ名（原典表記）	和訳（原典どおり）[10]	和名（推定）	学名（推定）
5.01	aalluu	低木の一種（トガスグリ）	スグリ属	*Ribes* spp.
5.02	kotolo	エゾスグリ（大きくない）	エゾスグリ	*Ribes latifolium* Jancz.
5.03	səŋətturə	木の一種（太くも高くもない、髄がある）	エゾノウワミズザクラ（樹木）	*Padus avium* Mill. (tree)
5.04	sinəktə	səŋətturə （木）の実、木に生じる液果の一種	エゾノウワミズザクラ（果実）	*Padus avium* Mill. (berry)

[10] 池上（1997）では報告者（インフォーマント）名の略号を付してあるが、その引用は省略する。

表 5　（続き）

	ウイルタ名（原典表記）	和訳（原典どおり）	和名（推定）	学名（推定）
5.05	ulda	こけもも（siduxu）類の一種（低木）、その実	チシマイチゴ？	*Rubus arcticus* L.?
5.06	uldura	いちごの一種、エゾイチゴ（はまいちご）	チシマイチゴ？	*Rubus arcticus* L.?
5.07	xojoo	いちご（やまいちご、やちいちご、この植物全体またはその実をさしていう）（ホロムイイチゴ）	ホロムイイチゴ	*Rubus chamaemorus* L. s. lat.
5.08	miiktə	低木の一種、ばら（ナナカマドの実のように赤い）	タカネナナカマド	*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem.
5.09	xaxaa	こけももの一種のその実	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
5.10	gaakta	ツルコケモモ（実または全体）	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
5.11	siduxu	こけもも実（液果）	《コケモモ類》の果実全般？	*Vaccinium oxycoccos* L., *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh., or *Vaccinium vitis-idaea* L. (its berries in general) ?
5.12	səəgdə siduxu	マスフレップ[11]	果実の赤い《コケモモ類》？	Red berries of *Vaccinium oxycoccos* L., *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh., or *Vaccinium vitis-idaea* L.?
5.13	dəsiktə	クロスグリ	クロマメノキ	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
5.14	paama	こけの実、岩高蘭（実の色はくろい、食用）（この語はこの植物の全体または実をさして言う）	ガンコウラン	*Empetrum nigrum* L. s. lat.

2.6 Tsintsius et al. (1977); Ozolinia (2001)

本節からロシア（旧ソ連）側の資料に視点を移す。

『ツングース満州諸語比較辞典』（1975, 1977 年発行）に、1970 年代までの旧ソ連におけるウイルタ語研究の成果が反映されている。その第 2 巻である Tsintsius et al. (1977)によると、

[11] 「マスフレップ」は日本語樺太方言で、クロウスゴ（*Vaccinium ovalifolium* Sm.）やガンコウラン（*Empetrum nigrum* L. s. lat.）など、どちらかといえば青色のベリー類の俗称とみられる（村崎（編）（1998: 13）、井野（2006）、水島未記 p.c.にもとづく筆者の見解による）。報告者（インフォーマント）による和訳を忠実に示したものとはいえ、ウイルタ語の səəgdə「赤い」という修飾語と「マスフレップ」という訳にずれがあるようにみえる。

ウイルタ語の сэдуху [səduxu]はベリー類全般を指し、それに対応するウルチャ語の сэǯуху(н-)~сэǯэхэ(н-)は голубика（クロマメノキやクロウスゴを指すロシア語）、ナーナイ語の сэǯурхӣ, сэǯурхи(н-)はベリー類の（一種の）名称であるという。Tsintsius et al. (1977: 137)による、その記述を(1)に引用する。冒頭の大文字は、ウルチャ語の語形 сэǯуху(н-)にもとづく見出し語である。

(1) СЭǮУХУ(Н-) голубика

Ульч. сэǯуху(н-)~сэǯэхэ(н-) голубика.

Орок. сэдуху(н-) ягода (*вообще*).

Нан. сэǯурхӣ *К-У* (сэǯурхи(н-) *Бк*) *название ягод*.

(Tsintsius et al. 1977: 137)

同系統のツングース諸語のなかでも親縁関係の近い 3 言語の対応語が、ウイルタ語でのみベリー類の総称として用いられることを示唆している。

上記(1)のウイルタ語の前に сэ̄гдэ [səəgdə]「赤い」を付けて сэ̄гдэ(н-) сэдухи(н-)（同書にもとづき逐語的に訳せば「赤いベリー」）というと、брусника（ヒメツルコケモモまたはツルコケモモを指すロシア語）に限定されるという。

(2) *Орок.* [...] сэ̄гдэ(н-) сэдухи(н-)　брусника　(Tsintsius et al. 1977: 136)

Ozolinia (2001)はロシアで初めて単行本として発行されたウイルタ語辞典である。収録語彙の約半分は上述の『ツングース満洲諸語比較辞典』がもとになっている（Ozolinia 2001: 前文）。他には、K. A. Novikova のテキストから抽出した語彙、編者 L. I. Ozolinia 自身が 1989、1991、1994 年にウイルタ語話者 I. Ia. Fediaeva から聴取した語彙、B. Pilsudski による語彙、澗潟（1981）、池上（1997）の語彙も含めたという（ibid.）。それまでのウイルタ語研究を総合して、一冊の辞書に集成したものといえる（山田 2013: 50）。

Ozolinia (2001)はウイルタ語の方言を区別しない立場で編まれており、出典明記もないため、どの語彙がどちらの方言のものか判断することができない。

Ozolinia (2001)に収録された語彙のうちベリー類の名称に当たると考えられるものを整理して**表 6** に示す。

表 6　Ozolinia (2001)によるベリー類の名称

	ウイルタ名（原典表記）	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	ロシア語訳からの和訳	学名（推定）
6.01	аллу	красная смородина	allu	スグリ属（果実の赤い実）	*Ribes* spp.
6.02	капоӈа	красная смородина	kapoga	スグリ属（果実の赤い実）	*Ribes* spp.
6.03	сэӈэ̄ттурэ	1) багульник болотный; 2) черёмуха	səŋəətturə	1) ヒメイソツツジ[12]； 2) エゾノウワミズザクラ	*Rhododendron tomentosum* Harmaja subsp. *subarcticum* (Harmaja) or *Padus avium* Mill.
6.04	синэктэ ~сиӈэктэ	ягоды черёмухи, черёмуха	sinəktə ~siŋəktə	エゾノウワミズザクラの実	*Padus avium* Mill. (berry)
6.05	улдура	земляника	uldura	ノウゴウイチゴ？	*Fragaria iinumae* Makino ?
6.06	миктэ ~миттэ	рябина (куст)	miktə ~mittə	タカネナナカマド	*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem.
6.07	чуиктэ	брусника	čuiktə	ツルコケモモまたはヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
6.08	ґа̄ӄта	клюква (ягоды)	gaakta	ツルコケモモまたはヒメツルコケモモ（果実）	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh. (berry)
6.09	ҳаӄӄа	брусника	xakka	ツルコケモモまたはヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
6.10	сэ̄гдэ(н-) сэдуху(н-)	брусника (ягоды)	səəgdə səduxu	ツルコケモモまたはヒメツルコケモモ（果実）	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh. (berry)
6.11	досоӄто ~досиӄтэ	черника, голубика	dosokto~dosiktə	クロウスゴ？またはクロマメノキ	*Vaccinium ovalifolium* Sm. ?　or *Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
6.12	са̄даи ~са̄даj	ягода голубика (гонобобель)	saadaji ~saadai	クロマメノキ（果実）	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz. (berry)

[12] ヒメイソツツジ（*Rhododendron tomentosum* Harmaja subsp. *subarcticum* (Harmaja)）はベリー類でないが、6.03 の語義に含まれるとされているので本表に載せる。

表 6　（続き）

	ウイルタ名（原典表記）	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	ロシア語訳からの和訳	学名（推定）
6.13	пāма	шикша (ягода)	paama	ガンコウラン（果実）	*Empetrum nigrum* L. s. lat. (berry)
6.14	сэдуху(н-) ~сэдухи(н-)	ягода (вообще)	səduxu ~səduxi	ベリー（全般）	Berries (in general)

2.7 Sem et al. (2011)

Sem et al. (2011)は、L. I. Sem ならびに Iu. A. Sem が 1962～1963 年に行った調査とその後の研究による遺稿を、遺族かつ研究者である T. Iu. Sem が整理して発行した資料集である。前節で紹介した Tsintsius (1977)や Ozolinia (2001)と異なり、方言を区別する立場でまとめられている。

Sem et al. (2011: 62)は、ウイルタ語が「北方言（東サハリン方言）」と「南方言（ポロナイスク方言）」の 2 方言に分けられるとした。これは、池上（1994 [2001]）による「北方言」と「南方言」の分類に一致する。

Sem et al. (2011)のうち 95-154 頁が「ウイルタ語・ロシア語方言辞典」となっており、各語彙項目に方言の略号が付されている。Sem et al. (2011: 95-154)に収録された語彙のうちベリー類の名称に当たると考えられるものを整理して**表 7** に示す。

表 7　Sem et al. (2011)によるベリー類の名称

	ウイルタ名（原典表記）	方言	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	和名（推定）	学名（推定）
7.01	āлло	北	красная смородина	aallo	スグリ属（果実の赤い実）	*Ribes* spp.
7.02	капоγа	南	красная смородина	kapoga	スグリ属（果実の赤い実）	*Ribes* spp.
7.03	капоγа	北	название красных ягод	kapoga	赤色のベリー類の名称	(a term for some or a kind(s) of red berries)
7.04	улдура	南	земляника	uldura	ノウゴウイチゴ？	*Fragaria iinumae* Makino ?
7.05	сидуху мōни	南北	черемуха (дерево)	siduxu mooni	エゾノウワミズザクラ（樹木）	*Padus avium* Mill. (tree)
7.06	сэнгэттурэ	南北	черемуха	səŋətturə	エゾノウワミズザクラ	*Padus avium* Mill.
7.07	синэктэ	南北	черемуха (ягоды)	sinəktə	エゾノウワミズザクラ（果実）	*Padus avium* Mill. (berry)

表 7　（続き）

	ウイルタ名（原典表記）	方言	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	和名（推定）	学名（推定）
7.08	хо о[13]	南北	морошка (ягода)	xojo	ホロムイイチゴ	*Rubus chamaemorus* L. s. lat.
7.09	мӣктэ (мони)	北	рябина	miiktə (mooni)	ナナカマド または タカネナナカマド[14]	*Sorbus commixta* Hedl. var. *commixta* or *Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem.
7.10	гāкта	南北	клюква	gaakta	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
7.11	сэ̄гдэ сидуху	北	брусника	səəgdə siduxu	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
7.12	дусуктэ	南	1) голубика, 2) черника	dusuktə	クロウスゴ？ または クロマメノキ	*Vaccinium ovalifolium* Sm.? or *Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
	дусиктэ	北		dusiktə		
7.13	сāдаи	北	голубица	saadaji	クロマメノキ（果実）	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz. (berry)
7.14	пāма	南北	шикша (ягода)	paama	ガンコウラン（果実）	*Empetrum nigrum* L. s. lat.
7.15	сидуху	南	ягоды (общее название)	siduxu	ベリー（全般）	Berries (in general)

2.8 Missonova (2013)

Missonova (2013)は、民族学者の視点からウイルタ語の語彙を分野ごとに整理した資料で、300-306 頁に「植物」の関連語彙がまとめられている。方言を区別する立場で、方言ごとの対応が明確である場合には方言が略号で示されている。あえて方言差を明記せず、音形の揺れまたはその他のヴァリアントのように記載することもある。

Missonova (2013)に収録された語彙のうちベリー類の名称に当たると考えられるものを整理して**表 8** に示す。

[13] xojo としたかったところ、なんらかの理由で j が印字できず、半角 1 字分の空白ができたと推測する。
[14] ( )の mooni（moo-ni; tree-3SG）を付ければ、その樹木を指す。

表 8　Missonova (2013)によるベリー類の名称

	ウイルタ名（原典表記）	方言	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	ロシア語訳からの和訳	学名（推定）
8.01	āаллӯ ~аллу	-	красная смородина	aalluu~allu	果実の赤いスグリ属	*Ribes* spp. (with red berries)
8.02	котоло	-	смородина чёрная (ягоды)	kotolo	果実の黒いスグリ属（果実）	*Ribes* spp. (with black berries)
8.03	котоло мōни	-	смородина чёрная (куст)	kotolo mooni	果実の黒いスグリ（低木）	*Ribes* spp. (shrub)
8.04	капоґа	-	смородина (чёрная)	kapoga	果実の黒いスグリ属	*Ribes* spp. (with black berries)
8.05	улдура	南	земляника	uldura	ノウゴウイチゴ？	*Fragaria iinumae* Makino ?
8.06	сэŋэттурэ	-	черемуха (дерево)	səŋətturə	エゾノウワミズザクラ（樹木）	*Padus avium* Mill. (tree)
8.07	синэктэ	-	черемуха (ягоды)	sinəktə	エゾノウワミズザクラ（果実）	*Padus avium* Mill. (berry)
8.08	пулмэктэ	-	шиповник (куст)	pulməktə	ハマナス（低木）	*Rosa rugosa* Thunb. (bush)
8.09	утāрипӯ	-	шиповник (ключие ветви), ёж	utaaripuu	ハマナス（小枝に棘）、ハリネズミ[15]	*Rosa rugosa* Thunb. (branch with thorns)
8.10	кијōкто ~кијокто сэдухини	-	шиповник (плоды)	kijookto ~kijokto səduxini	ハマナス（果実）	*Rosa rugosa* Thunb. (berry)
8.11	хојō	-	морошка	xojoo	ホロムイイチゴ	*Rubus chamaemorus* L. s. lat.
8.12	олʒига	-	малина	olǰiga	エゾイチゴ	*Rubus idaeus* L. subsp. *melanolasius*
8.13	мӣктэ	-	рябина (дерево)	miiktə	ナナカマド（樹木）	*Sorbus commixta* Hedl. var. *commixta*
8.14	мӣктэ ~мӣктэ сэдухини	-	рябина (куст)	miiktə~miiktə səduxini	タカネナナカマド（低木）	*Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem.
8.15	гāкта~гакта	-	клюква	gaakta	ツルコケモモまたはヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.

[15] ハリネズミは動物でベリー類名称に当たらないが、8.09 の語義に含まれるため引用として掲載する。

表 8　（続き）

	ウイルタ名（原典表記）	方言	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	ロシア語訳からの和訳	学名（推定）
8.16	хакā	北	брусника болотная, тундровая (растет возле моря, плотная, кислая)	xakaa	湿地、ツンドラのツルコケモモまたはヒメツルコケモモ（海辺に生え、実がつまっていて、酸味がある）	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
8.17	хахā	南		xaxaa		
8.18	сэ̄гдэ	-	брусника	səəgdə	ツルコケモモまたはヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
8.19	сэ̄гдэ сэдухи	北	брусника	səəgdə səduxi	ツルコケモモまたはヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
8.20	сāдаи	北	голубика	saadaji	クロマメノキ	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
8.21	дө̄сиктэ	南	голубика	dəsiktə	クロマメノキ	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
8.22	дусиктэ	北	черника	dusiktə	クロウスゴ？	*Vaccinium ovalifolium* Sm. ?
8.23	(сōгдо) сэпэ сэдухини	北	черника	(soogdo) səpə səduxini	クロウスゴ？	*Vaccinium ovalifolium* Sm. ?
8.24	пāма	-	шикша	paama	ガンコウラン	*Empetrum nigrum* L. s. lat.
8.25	сэдухи	北	ягода (вообще)	səduxi	ベリー（全般）	Berries (in general)
	сидуху	南		siduxu		

2.9 Bibikova et al. (2025)

Bibikova et al. (2025)は、ウイルタ語北方言の話者である E. A. Bibikova が筆頭著者となり、民族学者 L. I. Missonova、言語学者 A. M. Pevnov と共同で編んだ、学習者用のウイルタ語・ロシア語／ロシア語・ウイルタ語辞典である。単行本の辞典として母語話者が主体で著されたものは、この言語史上初といえる。

E. A. Bibikova は、Missonova (2013)の主要なインフォーマントでもある。Bibikova (2025)でも同一の両名が共同しており、内容に Missonova (2013)と共通する部分も多い。ただし、植物種の説明が充実しており、かつて池上二良が監修したウイルタ語教科書（Ikegami et al. 2008）

による書記法で、南・北方言の別や出典を略号で示す方針が徹底している点に特徴がある。

Bibikova et al. (2025)に収録された語彙のうちベリー類の名称に当たると考えられるものを整理して**表 9** に示す。

表 9　Bibikova et al. (2025)によるベリー類の名称

	ウイルタ名（原典表記）	方言	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	ロシア語からの和訳	学名（推定）
9.01	āллӯ	南北	смородина сахалинская (ягоды тёмно-красные, опушённые белыми волосками)	aalluu	トガスグリ（果実が暗黒く、白い腺毛に覆われている）	*Ribes sachalinense* (F. Schmidt) Nakai
9.02	котоло	北	ягоды чёрной смородины	kotolo	果実の黒いスグリ属（果実）	*Ribes* spp. (berry)
9.03	сэŋэттурэ	南北	черемуха (дерево)	səŋətturə	エゾノウワミズザクラ（樹木）	*Padus avium* Mill. (tree)
9.04	синэктэ	南北	черёмуха (ягоды)	sinəktə	エゾノウワミズザクラ（果実）	*Padus avium* Mill. (berry)
9.05	утарипу	南	шиповник	utaripu	ハマナス	*Rosa rugosa* Thunb.
9.06	кијōкто	北	шиповник	kijookto	ハマナス	*Rosa rugosa* Thunb.
9.07	сӣмэктэ	南	шиповник	siiməktə	ハマナス	*Rosa rugosa* Thunb.
9.08	пулмэктэ	南北	разновидность шиповника)	pulməktə	ハマナス（低木）	*Rosa rugosa* Thunb. (shrub)
9.09	хахā	南	морошка (?)[16]	xaxaa	ホロムイイチゴ？？	*Rubus chamaemorus* L. s. lat. ??
9.10	хојō	北	морошка	xojoo	ホロムイイチゴ	*Rubus chamaemorus* L. s. lat.
9.11	хојō	南	малина	xojoo	エゾイチゴ または チシマイチゴ	*Rubus idaeus* L. subsp. *melanolasius* or *Rubus arcticus* L.
9.12	улдура	南	земляника	uldura	ノウゴウイチゴ？	*Fragaria iinumae* Makino ?

[16] Bibikova et al. (2025)原典で(?)が付き、出典が池上（1997）となっている。池上（1997）における xaxaa の和訳（本稿**表 5** の 5.09）の（日本語としての）解読に難儀したためと推測される。池上（1997）の日本語、および、諸文献の総合的な比較から、この xaxaa は本来、9.17 の xakaa の対応語として、ツンドラのツルコケモモ（*Vaccinium oxycoccos* L.）またはヒメツルコケモモ（*Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.）あるいはその近似種とみるべきであろう。

表 9　（続き）

	ウイルタ名（原典表記）	方言	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	ロシア語からの和訳	学名（推定）
9.13	улдурэ	北	земляника	uldurə	ノウゴウイチゴ？	*Fragaria iinumae* Makino ?
9.14	мӣктэ	北	рябина (дерево)	miiktə	ナナカマド または タカネナナカマド（樹木）	*Sorbus commixta* Hedl. var. *commixta* or *Sorbus sambucifolia* (Cham. et Schltdl.) M. Roem. (tree)
9.15	мӣктэ	南	шиповник (куст)	miiktə	ハマナス（低木）	*Rosa rugosa* Thunb.
9.16	гāкта	南北	клюква	gaakta	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
9.17	хакā	北	тундровая брусника	xakaa	ツンドラのツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
9.18	сэ̄гдэ	北	брусника (сокращённое словосочетание *сэ̄гдэ сэдухи* красная ягода)	səəgdə	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ（səəgdə səduxi「赤いベリー」の短縮形）	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
9.19	сэ̄гдэ сэдухи	北	брусника	səəgdə səduxi	ツルコケモモ または ヒメツルコケモモ	*Vaccinium oxycoccos* L. or *Vaccinium microcarpum* (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.
9.20	дөсиктэ	南	голубика	dəsiktə	クロマメノキ	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
9.21	сāдаи	北	голубика	saadaji	クロマメノキ	*Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.
9.22	дусиктэ	北	черника, голубика	dusiktə	クロウスゴ または クロマメノキ	*Vaccinium ovalifolium* Sm. or *Vaccinium uliginosum* L. var. *japonicum* T. Yamaz.

表 9　（続き）

	ウイルタ名（原典表記）	方言	ロシア語訳（原典どおり）	池上（1997）式の表記への変換	ロシア語からの和訳	学名（推定）
9.23	сэ̄пэ сэдухини	北	черника (*букв.* ягода соболя)	səəpə səduxini	クロウスゴ（*lit.* クロテンのベリー）	*Vaccinium ovalifolium* Sm.
9.24	па̄ма	南北	шикша	paama	ガンコウラン	*Empetrum nigrum* L. s. lat.
9.25	сидуху	南	ягода (вообще)	siduxu	ベリー（全般）	Berries (in general)
	сэдухи	北		səduxi		

3.　考察

以上、ウイルタ語の語彙集・辞典からベリー類の名称とみられる語彙を観察した。現段階での考察を以下にまとめる。資料ごとの差異こそあれ、ある程度の確かさをもっていくつかの特徴が見えてきた。

第一に、ベリー類のうち、植物種とその果実の語彙的な呼び分けが確認できたのはエゾノウワミズザクラ（*Padus avium* Mill.）のみである。1900 年代初めに採録された Piłsudski (1987)を唯一の例外として、エゾノウワミズザクラについては音形の揺れも少なく、植物種あるいは樹木を səŋətturə、果実（ベリー）を sinəktə とされている。水島ほか（2005）、水島（2010）によると、エゾノウワミズザクラは果実だけでなく樹皮や枝、種子も、道具材料や儀礼、薬用などさまざまな用途で利用されたという。樹木と果実を語彙的に呼び分けることは、このような植物利用の実態に結びついていると考えられる。

ほかにハマナス（*Rosa rugosa* Thunb.）にも同様に、植物種あるいは樹木と果実を呼び分けていた可能性がある。その他の種では、種の名称と果実の名称を語彙上は区別せず、必要に応じ迂言的な手法で部位を呼び分けていたと考えられる。下記(3)(4)は植物種の名称を、その果実の意味で用いているとみられる例、(5)は迂言的に部位を呼び分けたと考えられる例である。なお、(4)は和え物の調理に関する説明で、ここで用いるのは生のガンコウランの果実である[17]。以下、植物種の名称に当たる部分を太字で強調する。

(3)　ogoro　beeduni　**xojoo**　xuruxəni.
　　ogoro　bee-du-ni　xojoo　xuru-xA(n)-ni
　　trout　month-DAT-3SG　cloudberry　ripen-PTCP.PFV-3SG
　「マスの月（七月）にはホロムイイチゴが熟しました。」
　　[2010 年採録、北方言]（山田 2025: 44；ロシア語訳を割愛）

[17] ガンコウランの採集を現地滞在で筆者も体験したが、その葉や茎は硬くて生食できるようなものではない。たとえ採集時に葉や茎が混ざってしまったとしても、果実以外は調理前に不純物として除去した。

(4) čala **paama**, ələpulə sundatta, ildaǰi, xuulǰipu
čala paama ələ-pulA sundatta ilda-ǰi xuul-ri-pu
that:LOC crowberry boil-PTCP.IMPERS.PFV fish oil-INS pour-PTCP.IPFV-1PL
ildaa, suullipu.
ilda+bA suuli+ri-pu
oil+ACC mix+PTCP.IPFV-1PL
「ガンコウランと茹でた魚を、油と…、油をかけて、混ぜ合わせて作ります。」
[2014 年採録、北方言]（山田 2025: 35；一部改変、ロシア語訳を割愛）

(5) **paama** siini
paama sii-ni
crowberry stem-3SG
「ガンコウランの茎」
南方言（池上 1997: 152）

第二に、ベリー類のみに共通する形態素（例えば、英語の blueberry や strawberry における berry のような形式）は見いだされない。なお、ベリー類であるかどうかにかかわらず接尾辞 -ktA が付く植物名称が散見されることについては別稿 Knapen et al. (2026 to appear)に譲る。

第三に、Schmidt (1868)および日本側の資料でベリー類を包括する名称、すなわち総称が確認できないのに対し、Piłsudski (1987)およびロシア側の資料では一貫して siduxu, səduxi をベリー類の総称と認めている。この語は方言差あるいは個人差により第一音節と第三音節の母音が異なる。以下、差異のある母音を V で代表させて sVduxV と略記する。

第三の点について確認を進めると、Schmidt (1868)および日本側で編まれた語彙集や辞典の定義では sVduxV を《コケモモ類》に紐づけている。ただ、テキスト資料（池上 2002）で sVduxV（同書の場合は siduxu）の用例を探すと、「いちご」「こけもものの実」「漿果」という 3 種類の訳が付されている。以下(6)～(8)はその例で、すべて南方言である。以下のウイルタ語例文において sVduxV とその訳に当たる箇所を太字とする。

(6) namu buwaatattaini **siduxu**mbə gatanničindaa.
海の 島［へ］ **いちご**を とりに行くんだと（池上 2002: 54；［ ］は筆者補足）
(7) boo unigərinnee naa **siduxu**nnii
天の 星と 地の **こけもものの実**（池上 2002: 87）
(8) kətəəree は **siduxu**《**漿果**》を kurkə へ入れるおと。（池上 2002: 91）

3 種類の訳のあいだに相互矛盾はないが、日本語として(6)の「いちご」が《コケモモ類》と一致するかには疑問が残る。(8)の「漿果」といい、池上（2002）は siduxu が《コケモモ類》よりも意味範囲が広い包括的な概念と結びつく可能性を視野に入れていたのではないだろ

うか。こうしたことや媒介言語の影響を考慮すると、Schmidt (1868)や日本側の資料に情報提供した話者の認知においても sVduxV が包括概念と結びついていた可能性を排除できない。もっとも、証拠がないため可能性の域を出ない。

他方、Piłsudski (1987)、および、Tsintsius et al. (1977)をはじめとするロシア側の語彙集や辞典では、sVduxV をベリー類の総称と明確に定義している。下記(9)に Ozolinia (2001)に載る sVduxV の例文を引用する。ウイルタ語表記を池上（1997）式に転写し、基底形・グロス・和訳は Ozolinia (2001: 325)のロシア語訳にもとづき筆者が作成した。グロスと訳では sVduxV を **X** に置き換える。

(9)	walusal…	duwa	sundatta	təlipə	**səduxi**mbə	gatassi
	wa(a)lu-sAl	duwa	sundatta+bA	təli-pee?	**səduxi(n)**-bA	gata-si?
	Val(PLN)-PL	in.summer	fish+ACC	dry-CVB.CSEC	**X**-ACC	gather-PTCP.IPFV
	bitčiči.					
	bitči(n)-či					
	COP:PTCP.PFV-3PL					

ワールの人たちは夏、魚を干しては **X** を採りながら暮らしていた。

（Ozolinia 2001: 325）

この例文で、仮に **X** を特定の種のベリー類に限定すると、並列する sundatta「魚」[18]という包括概念とのバランスが悪く、文脈上やや不自然となる。ワール周辺では夏季に《コケモモ類》に限らず多様なベリー類が実る。səduxi をそのようなベリー類全般と捉え、（意訳で）「夏季に漁撈をしたりベリー採集をしたり」という一般化された内容とみれば理解しやすい。

上で見てきた資料でも帰納的に sVduxV が総称であることを想起させる例がある。Sem et al. (2011)（本稿の**表 7**）により siduxu mooni（siduxu moo-ni; **X** tree-3SG; *lit.* **X**'s tree）が「エゾノウワミズザクラの木」を指すといい、Missonova (2013)（本稿の**表 8**）により kijokto səduxini（kijokto səduxi-ni; *Rosa.rugosa.*Thunb. **X**-3SG; *lit.* **X** of *Rosa rugosa* Thunb.）が「ハマナスの果実」を、miiktə səduxini（miiktə səduxi-ni; a.species.of.rowans **X**-3SG; *lit.* **X** of a species of rowans）が「タカネナナカマドの果実」を指すという。複数の資料で səəgdə səduxi（*lit.* red **X**）はヒメツルコケモモまたはツルコケモモ（ロシア語でいう брусника）を指すといわれる。このように sVduxV と共起する植物名称にはバラ科もツツジ科もある。ここでも、**X** を特定の種の果実に限定するよりも、ベリーの総称と理解するほうが容易である。

以上、第一から第三の考察を述べたが、最後に全般的なコメントを一つ補足する。民俗分類にもとづく植物名称と植物学上の分類は必ずしも一対一で対応しない。このことは本稿において《コケモモ類》で顕著である。Missonova (2013)の示唆、および E. A. Bibikova (p.c.)に

[18] sundatta「魚」は、サケマス類（dawa「シロザケ」、ogoro「カラフトマス」など）、əskə「カレイ」、kaaŋai「コマイ」、arku「キュウリウオ」などの幅広い魚種を包括する総称である。

もとづく筆者の考察によれば、ヒメツルコケモモとツルコケモモという植物学上の種別ではなく、生育地の違いや果実の特徴により gaakta, xakaa/ xaxaa, səəgdə (səduxi)という呼称で分けられるとみられる。《コケモモ類》以外でも、本稿で見た限り、スグリ属の区別は不明瞭であり、バラ科の植物種ではエゾノウワミズザクラ、ホロムイイチゴ、ナナカマド属[19]を例外として名称や指示対象が資料ごとに異なり、定まらない。こうした問題を含め、ウイルタ語のベリー類名称ないし植物名称をこの先どのように整理してゆくかが検討課題である。

4. 結論

本稿では、19 世紀中ごろから 2025 年現在までに編纂された語彙集・辞典をもとに、ウイルタ語におけるベリー類の名称を整理し、その特徴を考察した。その結果、以下の点が明らかになった。

第一に、ベリー類の名称は細分化されており、ウイルタの居住域の自然環境や生活様式を反映した民俗分類の存在が示唆される。特に、エゾノウワミズザクラについては、（少なくとも 1900 年代から現在までの範囲で）樹木としての名称と果実を表す名称が語彙的に区別されており、同種が利用面でも重要であることがうかがえる。おおよそ他の植物種については、植物種と果実（ベリー）を分けず、必要に応じて迂言的な手法で呼び分けると考えられる。

第二に、ベリー類に共通する語形成要素は確認できない。特定の接尾辞-ktA が植物名称に散見されるが、それがベリー類に固有の形式とはいえない。

第三に、ベリー類全般を包括する総称としての sVduxV（siduxu, səduxi ほか）が、特にロシア側資料で確認される。日本側の資料では限定的に捉える傾向があるが、テキスト用例やロシア語訳との対応から判断すると、sVduxV がより広い意味領域、すなわち「ベリー類一般」を表わす可能性が高い。これは、ベリー類に対する包括的な認知の存在を示唆する。

同系統のウルチャ語やナーナイ語では sVduxV の対応語が総称でないこと（Tsintsius et al. 1977）も考慮すると、ウイルタ語におけるベリー類の総称、ないし、ウイルタによるベリー類の包括的な認知が、いつ、どのように形成されたのか、興味深いところである。同じくベリー類の総称をもつニヴフ語（丹菊 2013 参照）との比較、アイヌ語との比較、ロシア語の ягода（ベリー類の総称）との関係など、歴史言語学や社会言語学の観点でも考察の余地が十分にある。

以上の点から、ウイルタ語のベリー類名称体系は、細密な民俗分類と包括的な上位概念が併存する多層的な構造を持ち、方言差や記録時期、媒介言語の違いによる揺れも考慮しつつ

[19] 南方言の mejila（池上 1997 ; 川村 1940、澗潟 1981，Piłsudski 1987 にも表記こそ違うが対応する語彙項目あり）はナナカマド属の何らかの名称であることは確かだが、植物種や指示対称（樹木か果実か）は判然としない。Piłsudski (1987: 184)では“service tree/ berry”とされており食用果実も指すと解釈できる。Ozolinia (2001: 184)では「миǯила （植）樹木（？）」（筆者訳）とあり植物種が不明となっている（ため、表 6 に掲載しなかった）。Bibikova et al. (2025: 91)では「миǯила /миǯиллā/ [n; s: I], мирала [n]; меǯила /меǯиллā/ [n; s: I] ヤナギ [n]; ナナカマド [s: I]」（s: 南方言／n: 北方言／I: 池上（1997））とあり、北方言ではヤナギ属の樹木を指すとされる。筆者の現地調査において E. A. Bibikova (p.c.)はタカネナナカマドの果実を miiktə səduxini（cf. 表 8: 8.14）と呼び、実際に採集して食利用していた。Bibikova の話すウイルタ語北方言で mejila~mijila という語をナナカマド属に対して用いず、səduxi (**X**)をベリー類の総称と捉えれば、ナナカマド属の木から採れるベリーを səduxi という語を用いて迂言的に指示していると考えられる。

理解する必要があるといえる。民俗分類と植物学上の分類が一致しないことにも、改めて注意を向けたい。今後は、辞典資料に加えてテキスト資料や音声資料、現地調査にもとづく用法の実態を精査することで、ウイルタ語の植物名称体系の全体像の再構成が期待される。

謝辞

* 2008～2015 年にサハリンで行ったウイルタ語調査において、言語のみならず文化の全般についてご教示くださった E. A. Bibikova 氏（ウイルタ語北方言の伝承者・教育者）に感謝申し上げる。

本稿の大部分は、水島ほか（2025）、Knapen et al. (2026 to appear)を代表論文とする共同研究の一環として取り組んだ調査にもとづく。ウイルタ語やロシア語の植物名称と学名との関連づけ、および、学名の表記について、水島未記氏から貴重なご意見やご教示をたまわった。ここに記して感謝を申し上げる。

拙稿を丁寧に読み解き、形式面から内容面まで、建設的なコメントをくださった匿名の査読者 2 名にも謝意を表する。ただし、本稿におけるすべての誤謬は筆者の責任に帰す。

グロスや基底形表記に用いた記号・略号の一覧

A: 母音調和で交替する母音／1: 一人称／3: 三人称／ACC: 対格／COP: コピュラ動詞／CVB: 副動詞／CSEC: 連続／DAT: 与格／IMPERS: 非人称／IPFV: 不完了／INS: 道具格／*lit.*: 逐語訳／LOC: 場所格／PFV: 完了／PL: 複数／PLN: 地名／PTCP: 形動詞／SG: 単数

参考文献

Bibikova, E. A., L. I. Missonova, & A. M. Pevnov 2025. *Uil'tinsko-russkii i russko-uil'tinskii uchebnyi slovar'*. Moskva/ Sankt-Peterburg: "Prosvesshenie".

池上二良（編）1983『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』札幌／網走：北海道教育委員会／網走市北方民俗文化保存協会

—— 1994「ウイルタ語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38［池上（2001: 247-283）所収］.

——（編） 1997『ウイルタ語辞典』札幌：北海道大学図書刊行会.

—— 2001『ツングース語研究』東京：汲古書院.

——（採録・訳注）2002『増訂ウイルタ口頭文芸原文集』（ツングース言語文化論集 16）（ELPR A2-013）吹田：大阪学院大学.

Ikegami, J. 1974 "Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen". *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin*. pp.271-272. Berlin: Akademie-Verlag ［池上（2001: 395-39）所収］.

Ikegami, Jirō et al. (eds.) 2008. *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski*. Iuzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe knizhnoe izdatel'stvo.

井野俊介 2006「8 月 27 日　アレクサンドロフスク・サハリンスキー　ドゥエ、北緯 50 度線旧国境」https://hit-u.ac/excursion/06Karafuto/0827/index.html（最終閲覧日：2025 年 12 月 31 日）

川村秀弥 1940「土語と土俗」私製［池上（編）1983 により翻刻］.

Knapen, M., M. Mizushima, H. Shiraishi, I. Tangiku, & Y. Yamada. (2026 to appear) “Ethnobotany on Sakhalin: The History and Structure of Nivkh, Uilta and Ainu Taxonyms and Taxonomies”. In: M. Robbeets & M. Knapen (eds.) *Linguistic Reconstruction and Historical Ecology in the North Pacific Rim* (New Frontiers in Historical Ecology). New York: Routledge.

潤潟久治（編）1981『ウイルタ語辞典』網走：網走市北方民俗文化保存協会.

Missonova L. I. 2013. *Leksika uil’ta kak istoriko-etnograficheskii istochnik*. Moskva: Nauka.

水島未記 2010「サハリン先住民の自然資源としての植物：利用植物一覧」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史：北方文化共同研究報告』17-52，札幌：北海道開拓記念館.

水島未記・タチヤナ P. ローン・会田理人 2005「サハリン先住民の植物利用（ウイルタを中心に）」『18 世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバータ州における諸民族と文化：北方文化共同研究事業研究報告』125-186，札幌：北海道開拓記念館.

水島未記・白石英才・丹菊逸治 2017「サハリンの植物相および植生から見たニヴフの植物資源利用」『北海道博物館研究紀要』1: 25-64.

水島未記・白石英才・丹菊逸治・山田祥子・Martijn Knapen. 2025「〈調査報告〉サハリンの民族植物学：現代の視点から見た『Reisen im Amur-Lande und auf der Insel Sachalin』1」『北海道博物館研究紀要』10:55-84.

村崎恭子（編）1998『樺太アイヌ語　語彙編』（平成 10 年度言語研修：アイヌ語教材（III-3））東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Ozolinia, Larisa V. 2001. *Oroksko-russkii slovar’: okolo 12000 slov*. Novosibirsk: Izdatel’stvo SO RAN.

ピウスツキ，ブロニスワフ／高倉浩樹（監修）／井上紘一（訳編・解説）2018『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌：20 世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルタ』（東北アジア研究センター叢書第 63 号）仙台：東北大学東北アジア研究センター.

Piłsudski, Bronisław 1987. *Materials for the Study of the Orok (Uilta) Language and Folklore II*. Poznan: Uniwersytet im. Adama Mickiewicza w Poznaniu.

Roon, T. P. 2010. *The Uilta of Sakhalin: A Historical and Ethnographic Study of the Traditional Economy and Material Culture of the 18th-20th Centuries.* Yuzhno-Sakhalinsk: Sakhalin Oblast Printing Plant/ Sakhalin Regional Museum.

—— 2022. “Uil’ta (orochiony, oroki): Khozhiaistvenno-kul’turnyi tsikl zhizneobespecheniia”. In: L. I. Missonova & A. A. Sirina (eds.) *Tunguso-man’chzhurskie narody Sibiri i Dal’nego Vostoka*, 662-671, Moscow: Nauka.

白石英才 2024「北方少数民族ニヴフの生活と文化」中川裕『ゴールデンカムイ：絵から学ぶアイヌ文化』（集英社新書 1202D）358-373，東京：集英社.

高橋英樹 2024『サハリン島の植物』札幌：北海道大学出版会.

Schmidt, Friedrich 1868. *Reisen im Amur-Lande und auf der Insel Sachalin, im Auftrage der Kaiserlich-Russischen Geographischen Gesellschaft Ausgefuert. Botanischer Theil* [Travels in the Amur Region and on Sakhalin Island] Mémoires de l’Academie Impériale des Sciences de St. Pétersbourg, VIIIe Serie, Tome XII, No.2.

Sem, Iu. A., L. I. Sem, & T. Iu. Sem 2011. *Materialy po traditsionnoi kul’ture, fol’kloru i iazyku orokov: Dialektologicheskii oroksko-russkii slovar’*. Vladivostok: Dal’nauka.

Tsintsius, V. I. et al. 1977. *Sravnitel'nyi slovar' tunguso-man'chzhurskikh iazykov*, Tom II. Leningrad: Izdatel'stvo "Nauka".

丹菊逸治 2013「ニヴフ語の漿果の総称について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』22: 59-62.

――2016「ベリー：第二の主食（ニヴフ）」永山ゆかり・長崎郁（編）『シベリア先住民の食卓：食べものから見たシベリア先住民の暮らし』146-150，平塚：東海大学出版部.

津曲敏郎 2014「ピウスツキ採集のウイルタ語民話テキスト『ネズミの母親とカエルの母親』」北方言語ネットワーク（編）『北方言語研究』4: 213-231，札幌：北海道大学大学院文学研究科.

山田祥子 2013「ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究」北海道大学大学院文学研究科博士学位申請論文.

――（採録・訳注）2025『ウイルタ語音声資料』（Muroran Working Papers in Linguistics, No.2）室蘭：室蘭工業大学ひと文化系領域.

山本祐弘 1979「ポロナイツンドラの北方自然民族の生活と住居」知里真志保・山本祐弘・大貫恵美子『樺太自然民族の生活』129-230，東京：相模書房.

執筆者紹介

氏名：山田　祥子

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域

Email：yamada@muroran-it.ac.jp